

吉本隆明をどうとらえるか

● 北川透

● 片岡啓治

● 竹内成明

● 大久保そりや

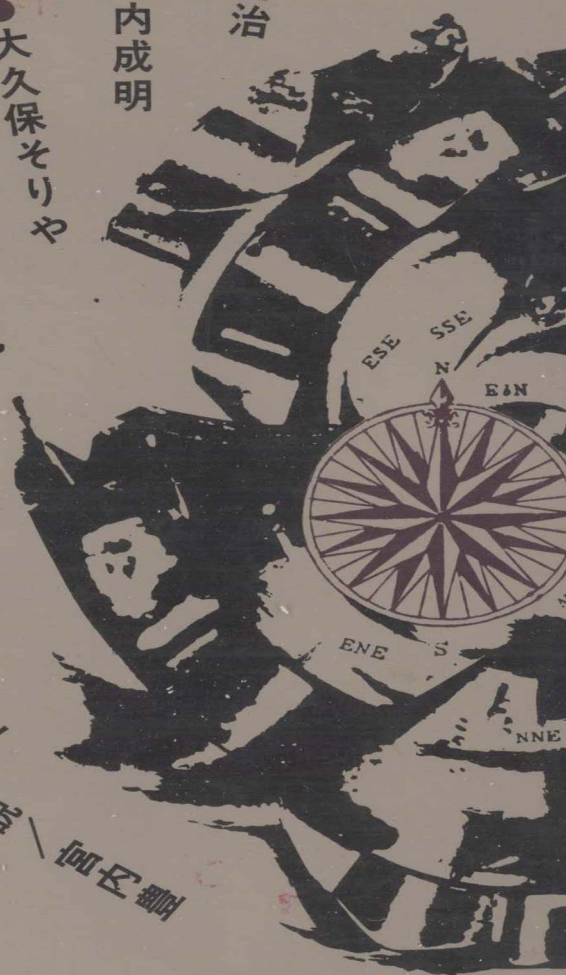
● 時枝誠記

● 重原隆四

● 丹田省耕

● 櫻木村

● 笠原 一 何長綱





吉本隆明をどうとらえるか

芳賀書店

北川透 ● 片岡啓治 ● 竹内成明 ● 大久保そりや ● 時枝誠記 ● 重尾隆四 ● 平田武靖 ● 遠丸立 ● 解説 / 宮内豊

吉本隆明をどうとらえるか

昭和45年11月20日 第一版第一刷発行

著 者 北川透・片岡啓治・竹内成明
大久保そりや・時枝誠記
重尾隆四・平田武靖・遠丸立

発行者 芳賀 章

印刷所 八光印刷
製本所 江口製本

発行所 芳賀書店
東京都千代田区神田神保町2-7
電話(263)1956 振替東京42503

定価 900円

0095—509170—6903

吉本隆明をどうとらえるか

I

7 『共同幻想論』に対する一視点／北川透

41 幻想における生／片岡啓治

II

81 吉本隆明の言語論批判／竹内成明

109 吉本言語論の陥穽／大久保そりや

141 詞辭論の立場から見た吉本理論／時枝誠記

Ⅲ

159 吉本隆明試論／重尾隆四

215 吉本隆明論の反省／平田武靖

246 吉本隆明の自立とラジカリズム／遠丸立

265 解説／宮内豊

装幀 〓 池田龍雄

I

『共同幻想論』に対する一視点

北川透

わたしは自らを計量しながらつまり完全に覚醒しながら歩まねばならなかった（「固有時との対話」）

わたしたちは繰り返しの毎日の生活のなかで、ふと立ちどまるようにして、自分の内部に決して透視しえない闇のようなものがあることに気づかせられる。そして、意志とか選択としてあらわされるわたしたちの志向性が、その闇のようなものに呪縛されているのをおぼろげに感じている。しかし、日常の生活過程では、それに一瞬気づかせられることがあるとしても、むしろ、闇の世界の支配に身をゆだねることを選ぶとっている。このおのれの存在の底にあるものを解き得ないでも、わたしたちが差し当って暮らしてゆくことに不都合はないからだ。それが充分にへ生

きるゝことではないとしても、ともかく生きていくために闇の淵はまたぎ越えられねばならぬ。そして、この根源的不自由ともいふべきものに不感症になりながら、しかし、不自由をむしろ生活上の些事の上に感じてゐる。せわしない鼠のような生活。ところが、待っていてもパスが来ないというような些事に感じる不都合が解決されても、なお、わたしたちは自由ではない。住む家が狭いというような不都合が解決されたとしても、なお、わたしたちは闇におおいかぶされた人間だ。確かに視ることをやめれば、その闇は霞が晴れるように遠ざかっていくようにも感じられる。おまえはいったい何者なのか、闇に呪縛されたものなのに、どこから来てどこへ行くかとする者なのか、と内心からひそかに問いかけてくる声に、聞こえないふりをすれば、わたしたちは曇りない人間として、生きることができると。それがわが風土では慰薬を得る方法であり、血族たちと調和していく方法だ。解きえない存在の闇をかくして、わたしたちは朗らかなあいさつや日常会話の中に安らぎを覚えることができる。しかし、それにもかかわらず、わたしたちはその調和のなかで不安に吊るされた存在であり、憑かれたように闇のなかに突き進んでいってしまうことがある。闇の支配を断ち切るために、わたしたちはどれほど調和から背かれた人間であることができるか。

すでに、わたしたちは、吉本隆明がその早い時期の詩篇において次のようにうたっていることを知っている。

長い生存の内側を逆行したときたとへ微小な出来ごとに過ぎないとしても 且て一度でも自

らを自らの手で葬ったことのある者は、あの長い冬の物象をむかへるために、感覚を殺ぎ、
哀歎を忘れ、幾重にも外殻をかぶってしまったわたしの魂の準備を決して嗤ふまい。さうし
てわたしはあたかも何ごとも起らなかつたやうにはじめてひとつの屈折を曲っていた。この
生存が限りなく長いことをわたしはひとつの美と感じなければならなかつた。それは何とい
ふ異様な美しさだつたらう。はじめに水のやうに触感された生は、しだいに屈折を加へてい
つた。わたしは自らを計量しながらつまり完全に覚醒しながら歩まねばならなかつた（「固有
時との対話」）

わたしはこの詩篇を読むたびに内心から衝きあげてくる何とも名状しがたい感嘆をおさえるこ
とができない。そこにはわたしなどがどうしてもたどりつくことのできない感性の位相がある。
それは、自らを自らの手で葬ったことのある人間が、感覚を殺ぎ、哀歎を忘れ、幾重にも外殻を
かぶつて、長い冬の物象をむかえらうという痛切な自己凝視に続いて、いわばそのような生存の長
さを「異様な美しさ」として感受する吉本の位相についてである。それはいわゆるナルシズム
とも違うものだ。そこには酔いも濁りもない。はじめての生は澄みきつた水のように触感され、
「わたしは自らを計量しながらつまり完全に覚醒しながら歩まねばならなかつた」のである。む
ろん、「固有時との対話」における「わたし」は、詩的な自己表出の尖端にさらされた「わたし」
であり、それを現実の吉本にそのまま重ね合わせることはできないが、しかし、その限りなく長
い生存を異様な美しさとして感受する位相と、同時に「わたし」がその生の軌跡を完全に計量し

覚醒しているという二律背反ともいふべき志向は、その後の吉本の文学的・思想的道程に一貫しているものを暗示している。それをただ單純に吉本における詩と科学という風には言えないだろう。彼の詩には、異様に覚醒している自意識があるし、同時に、彼の情勢論や思想論、あるいは「言語にとって美とはなにか」やここで問題にする『共同幻想論』等の理論的な作品には、詩的な直観や想像の働きの豊かな契機をなしている。それは二律背反というよりは、みごとに止揚と呼ぶべきであるかも知れない。そしてその一側面しかわたしたちが見ないとき、当の対象はずり落ちていってしまう。

ところで、わたしはといえば、「この生存が限りなく長い」ということを、「異様な美しさ」として感じたことがあるだろうか。幼児期からの体験をふりかえるようにしてみれば、わたしにとって朝がくるということは怖れであつたし、もし朝がこなかったらと想像することも怖れであつた。ましてやそれを美と感ずる位相に身をさらしたことがない。どう考えても、生まれた時から今まで、わたしの生は屈辱の連続というほかないし、惨めな河底にさらされた魚のようなものである。そこではみずからを計量して歩むなどということとは途方もないことだつたといえよう。わたしが十八歳の夏、パルタイに入ったのは、それまでの生存の屈辱の総決算であつたし、その結果はいっそう大きな屈辱でしかなかった。その時、みずからを量りうる何をもつていたといえるだろう。わが風土や親族の血で凝固した重たい臉をこじあけるようにして開き、これが覚醒だと信じたにもかかわらず、実はその覚醒そのものが一層大きな眠りに囲まれていたことを知つていつた時のいわば全身的な苦さ。このわが生の醜悪さ、それこそが自分のものにほかならぬとし

たら、わたしはそれを吉本の「異様な美しさ」に対置していくがいまいだろう。それにしても、かつてわたしの〈覚醒〉が、わが内なる闇の呪縛に支配されており、その〈覚醒〉からの覚醒がまだ充分に量り得ぬ苦渋をひそませている時、吉本の「異様な美しさ」と「完全な覚醒」の自覚は、わたしに羨望であると同時に憎悪であるような感情を喚び起すだろうか。しかし、言いうることは、そのような生理における不遜にとらわれたことのないことが、わたしの誇りである。わたしにあるのは端的な畏怖だ。「共同幻想論」を読み終った時、わたしをおそったのもこの感情にほかならない。ここでわたしが成し得ようとすることも、「わたしは自らを計量しながらつまり完全に覚醒しながら歩まねばならなかった」ことのより高次の確証である『共同幻想論』に対して、みずからの生の歩みを美と感受する位相からも「完全な覚醒」からもおそらくは背かれたものが、それにもかかわらず、わが内なる闇の呪縛と格闘しつつ寄せる共感と批判にほかならない。

このわが内なる闇がいかなる呪縛の構造をもっているかについて、吉本は〈禁制論〉のなかで未開社会の心性にまでさかのぼって考察をはじめている。

〈正常〉な個体は大なり小なり共同の禁制にたいして合意させられている。そしてこの合意は默契とよばれるのである。默契においても対象となるものはかならずある。そしてその対象は

ある共同性の内部にある。〈かれ〉の意識にとって対象が怖れであっても崇拜であってもいいことは、禁制のばあいとおなじだが、ただ〈かれ〉の意識は共同性によって、いわば赦されて狂れあっているという意識をふくんでいる。禁制ではかれの意識はどのように共同性の内部にあるようにみえても、じつは共同性からまったく赦されていない。いわば神聖さを強制されながらなお対象をしりぞけないでいる状態だといえる。（「禁制論」）

ここで吉本が、黙契を禁制とからみあっているものとしながらも、それと區別して抽出しているところに注意をひかれる。なぜならそこに、習俗と生活威力のからまった未開社会の禁制の独自の眺望を持った仮説として述べている。しかし、吉本が卓抜なのは、「禁制が支配している共同性は、どんなに現代めかしていて真理にたいしてラディカルにみえても、じつは未開をともなつた世界である」というように未開から現代まで共通した視座で貫くことのできるモチーフを強固にもっていることである。吉本のように考えれば、現在時において、わたしたちの志向性が、なかばわたしたちのものではなく、内なる闇に支配されていると感ずる時、この不透視の内なる闇に未開が入りこんできているといえよう。吉本はここで「正常な個体」の「正常」を〈でくくること〉によって、その屈折する意識を表現しているが、確かに未開にあっても現代にあっても共同の禁制に対して合意させられている個体は正常な個体ではなく、〈正常〉な個体である。そこではむしろ共同の禁制に対して合意させられることを無意識に拒むことによって心的に

共同社会から脱落する異常者のうちに本質が顕現するともいえる。しかし、異常者とは自由から見離されたものことだとすれば、〈禁制〉に金縛りされた個的な意識はどこへ行くことができるか。わたしはここで吉本がなぜ〈禁制論〉から書きはじめたのかという疑問に逢着したので。共同の禁制と、それに対する無意識的な合意である黙契によって犯されている人間は同時に可能性の前にひきだされている存在でもある。原初の人間存在が疎外した幻想性を、禁制Ⅱ黙契からはじめてしまった時、吉本は人間の思想に関する視野において、無意識のうちに或る限定を与えてしまったのではないか。

ここで示唆的なのは、キルケゴールが『不安の概念』で次のように述べていることである。創世記において、神がアダムに対して「されど善悪を知るの樹は汝その果を食らうべからず」と言ったといわれることに際して、キルケゴールは、禁止が欲望を呼びましたと仮定しないで、禁止が彼を不安がらせたのだと考える。キルケゴールによれば、アダムは〈無責〉の人間として考えられている。〈無責〉とは無知のことであるが、それは動物的な野蠻さではなくて、精神によって規定された無知である。もし、禁止が欲望を呼びましたと仮定すれば、欲望が自由を行使することの欲望として、アダムは自由についてひとつの知識をもつものでなければならぬ。それではアダムは〈無責〉の人間とは言えなくなる。「禁止は彼を不安がらせるのであって、その理由は禁止が自由の可能性を彼のうちにめざませるといふことにある。これまで不安の無として無責のかたわらを素通りしていたもの、それがいまや彼自身のうちに入りこんできており、それはここでもまだやはり無であるが、しかしそれは為しうるということの不安な可能性なので

ある。」(原佑・飯島宗享・共訳、傍点は原文)

むろん、わたしたちの風土において、アダムとは見知らぬ他者である。しかし、キルケゴールにおけるキリスト教的な思弁は遠ざけても、この〈無責〉の概念はわたしをひきよせる。決して、動物的な空なるものとしてでなく、いわば何事かを為しうる者としての不安をたたえた無そのものの深さ——そこにわたしたちは人間の意識の原初を見る。〈無責〉の状態においては、不安とは束縛された自由であり、意識はまだ意識として措定されてはいない。それにもかかわらず、それは夢みつつある精神だ。ところで、吉本によれば、この未開社会における原初の間は、村落の共同幻想によっておおいかぶされ、いわば個的な意識(幻想)は、ほとんどまるごと共同性によって包まれるようにしか存在しないと想定される。〈禁制〉と〈默契〉はからまったままびっしりと個体の意識のうちにはりつけられている。そこから吉本はモチーフとしてはまったく、〈默契〉は習俗をつくり、〈禁制〉は幻想の権力をつくるというような遠望をもつのであるが、それならばそのような〈禁制〉が彼を不安におとしこめるものとしての〈無〉は何をつくと遠望しうるのか。それは何ものかを為しうるということの不安な可能性、それは束縛された自由からそれみずから意識する自由へ、それは自己権力へ……、そのような階程を昇ることができるか。『共同幻想論』における〈禁制論〉から〈憑人論〉、〈巫殞論〉……〈他界論〉へと展開していくものなから、わたしが端的に不満を感じ、そこからはみだして夢想せざるを得ない理由は、おそらく吉本が『遠野物語』の民俗的な暗い閉じられた世界に視野を密着させて、原初の間のもつこの不安な可能性としての無に触れ得ないことにあるのではないかと思う。マル